

身体的視点における写真実践

芸術研究科 造形表現専攻
写真・映像領域 博士後期課程
2026年3月修了

李 若琦

主査 百瀬 俊哉 副査 大日方 欣一 結城 円

研究背景

画像が過剰に生産され、AI技術が成熟を続ける今日、写真制作者は撮るべき対象の喪失という危機に直面しており、画像の生成は撮影者の現場体験から次第に乖離しつつある。既存の写真理論の多くは、画像の受容、倫理、あるいは派生的な意味に焦点を当ててきたが、その結果、写真実践における知覚行為の研究には空白が生じている。本研究では、研究者自身が制作者としての立場から、写真実践における身体の中心的な役割を考察する。これにより、技術の進展がもたらす疎外感への克服を試みるものである。

研究方法・目的

本研究は、撮影者はどのように世界を経験するのか、そしてその体験はいかにして画像へと変換されるのかという二つの問いに答えることを目的としている。これにより、制作過程における曖昧な身体経験を解明し、写真の表現力を高めることを目指す。理論的枠組みとしてモーリス・メルロー＝ポンティの「身体現象学」を採用し、「身体図式」、「指向性」といった概念を用いて考察を行う。本研究では理論的研究と創作実践を組み合わせる手法をとり、その成果として『Shorter of Breath』および『Something about us』の二つの作品を制作した。

研究概要



作品『Shorter of Breath』は新型コロナウイルスの時期に制作した。研究者は福岡の海岸線に沿った徒歩旅行を通じて、心身の苦痛や虚無感に抗った。本作では、環境がもたらす特有の空気感と正方形フォーマットの閉鎖性を活用し、あの特殊な時期の疎外体験を視覚化している。また、詩の韻律や素材の物質的特性を写真集のデザインや展示に取り入れることで、自然を前にした個人の孤独と距離をメタファーとして表現した。



作品『Something about us』において、研究者は都市と自然の中間地帯を彷徨い、理論研究から導き出した手法を用いて身体の知覚能力を訓練し、写真を通じて日常生活における「エレメント」の流動を捉えようと試みた。ここでの撮影行為は、社会的規訓に抗い、麻痺した感覚を修復するための日常的儀式であり、均質化された風景の中で身体がいかに介入し、真実味のある現場体験を取り戻せるかを示している。

成果・まとめ

本研究は体験からイメージの転換経路を構築し、身体こそが写真実践の礎石であることを指摘した。結論として、心的イメージとは脳内にプリセットされた画面ではなく、身体的経験と現実が交渉した末に生じる動的な志向性であると明示する。写真は単に画像を製造する技術にとどまらず、身体図式の作動を通じて、マルチモーダルな感官体験を視覚形式へと変換するプロセスなのである。非物質化と情報過多が進む現代社会において、写真には存在論的な意義があると本研究は考える。それは、集中力を養い、身体知覚を回復させることで虚無に抗い、自らの存在を再確認するためのライフスタイルなのである。



指導教員コメント

作者は画像が氾濫し制作環境が大きく変容する現代において、写真実践の根幹を「身体的経験」に見出し、理論と制作を粘り強く往還してきた。身体現象学を踏まえた議論は抽象にとどまらず、長期の移動体験や環境との対峙を通じて作品として結実している。写真を知覚と存在を再確認する行為として捉え直した点に、本研究の確かな到達点が認められる。

百瀬 俊哉